

巻頭言

—長谷見一雄教授へ、感謝をこめて—

金沢美知子

長谷見一雄教授は、長年東大露文科主任を務められた川端香男里先生の最初期の門弟のおひとりとして博識と広い視野を特徴とする学風を受け継ぎ、あとに続く多くの後輩学究を牽引し、また本学スラヴ語スラヴ文学研究室を運営してこられました。

長谷見教授の研究の出発点はベールイに関するお仕事であり、研究人生の前半を主としてベールイと象徴主義、およびベールイと関わりの深い作家ゴーゴリについての考究に捧げられました。その後、スラヴ研究室の教員として東大に赴任されてからは、次第に 19 世紀文学作品の中のロシア語に対する関心を深められ、その過程でロシア語をめぐる様々な文化現象、辞書の歴史や活字・書籍文化などにも調査の対象を広げられました。他方、ロシア文学と並んでポーランド文学の領域でも、翻訳を中心に多くのお仕事を発表されています。

もし長谷見教授の研究の概貌を示すキーワードを 5 つ挙げるとすれば、ポーランド、ゴーゴリ、ベールイ、象徴主義に、ぜひとも「ロシアの言葉」を加える必要があります。ポーランド文学やロシア象徴主義が長谷見教授の主な研究領域であることはいうまでもありませんが、近年の授業参加者の中には、ご専門は「文学のロシア語」とであると理解している者も多いようです。長谷見教授の「ロシア語」に対する関心は深く、ただそれは文法的な観点からというよりは、人間の知的営為の歴史としての「ロシア語」への愛情に発しているように思われます。

授業や研究会では新旧の様々な辞書を卓上に広げ、また用意した無数の用例を参加者に示しながら、長谷見教授の「ロシア語」講義は行きつ戻りつするのが常でした。昨今の斜め読み文学研究には紡ぎ出すことのできない、なんとも贅沢な時間がそこには流れていたこととなります。そうした贅沢で幸福な時間を共有した記憶は、「神話研究会」をめぐる随筆を始め、年報記念号の執筆者全員の文章に痕跡をとどめているのではないのでしょうか。

長谷見教授はご自分から率先して座を盛り上げることは潔しとしなかったものの、面白い話題は大変お好きで、気心の知れた仲間とはできればお酒を酌み交わしながら、延々と

金沢美知子

話に興じておられました。若い頃からの趣味かつ特技であった将棋やチェスの話題も時おりその中に混じっていたことを、覚えています。

「辞書を読んでいてふと訪れる至福の瞬間」、とは2005年に長谷見教授が書かれた随筆です。この表題は、長谷見教授の「ロシア語」講義はまだ始まったばかりであり、これからも長い間、我々を啓発し続けるであろうと、語っているように思われます。途切れることのない今後の時間を見据えながら、まずはこの記念号の発行をもって、これまでの御恩への我々の感謝の気持ちといたします。